

一同橋數高百五十七 内公儀橋十二

〔浪花の風〕浪花の地は、日本國中船路の樞要にして、財物幅湊の地なり、故に世俗の諺にも、大坂は日本國中の賄所とも云、又は臺所なりともいへり、實に其地巨商富估軒を並べ、諸國の商船常に碇泊し、兩川口よりして、市中縱横に通船の川路ありて、米穀を始め日用の品はいふに及ばず、異國舶來の品に至る迄、直ちに寄場と通商なる故、何一つ欠るものなし、古來よりかくの如き土地から故、商估専らにして、人氣もおのづから其風に移り、利を謀ること他國に超て慧敏なり、故に淳朴質素の風は更に失ふて、只だ利益に走るの風俗のみ、士といへども、土著のものは自然此風に浸潤して、廉耻の心薄く質朴の風なし、これ浪花風俗の大概なり、

〔一話一言〕大阪狀

一此地米直段下直に候、○中 扱々結構成所にて、遊で食ふもの多き筈にて候、江戸より見候へば、半分は遊んで居り、氣の長き事急の間に不台、道をもうかり、あるき人をよほ候事を不知、供などに叱られ、肝をつぶし申候、大名往來など見候は、驚き可申候、正九ツを八時迄は、町中にて晝寐也、

一家作の仕方、至て上手にて、戸のままり、竈本の様子、臺所向棚のつり様など、感心いたし候、○中 一土用に成候へども、具足など干し候事、一向跡かたもなき事也、誰も見やうなど、いふものなし、重ては張ぬきにてもよし、町人いづれも人柄よく候處、此方體の家來御普請役など、家來ども其さま賤しく、氣の毒なる位也、嘸々わるせはしく下卑たる事と、さげすみ居り可申と耻入候、○中

六月○享和 七日

島崎金次郎様

大田直次郎